

正智深谷高等学校特別コラム

Mind Charging

Since 2020

第275回

植松 努

の名言

発行：入試広報室

発行日：令和3年10月11日

編集委員：入試広報室 鈴木



今回の言葉

「どーせ無理」という 考え方をなくしたい。

植松 努は、日本の技術者、実業家。北海道芦別市出身。北海道芦別高等学校を経て、1989年北見工業大学工学部応用機械工学科卒業。1989年菱友計算に入社。1994年同社を退社し、父が経営する植松電機に入社。1999年同社専務取締役。2005年人間力大賞グランプリを受賞。2006年カムイスペースワークスを設立し、代表取締役社長に就任。2016年植松電機代表取締役社長に就任。その他、NPO法人北海道宇宙科学技術創成センター理事も兼職。

Column

みなさんは今回紹介する植松努さんを知っているでしょうか。ドラマ『下町ロケット』のモデルになったと言われる人物です。ドラマの内容については調べてみてください。植松さんは植松電機株式会社の代表取締役社長、カムイスペースワークスの代表取締役社長、NPO法人である北海道宇宙科学技術創成センターの理事も兼職するという非常に多忙な立場でありながら、2002年より『CAMUI ロケット』の打ち上げ開発を行っており、小学校・中学校・高等学校を中心として主に10代を対象に講演活動を行なっています。

今回の言葉を知った時には“無理なこともあるよ…”と思うところもありましたが、植松さんの来歴やエピソードを調べてみると“自分で無理だと決めつけているのかも”と思いました。人は年齢や経験を重ねていくうちに、無理だと感じることも増えてきたように感じます。もちろん無理だと判断できるだけの知識が備わったことでもあるのですが、今回の言葉の中にもあるように『考え方』は大きいのだと思います。また、物事をどう捉えるかによって考え方も変わるという意味では『考え方=捉え方』でもあると思います。

この言葉を知った日の夕方に自転車に乗って走っていく小学生を見かけました。その時にふと自分の小学校時代を思い出しました。見かけた小学生と同じく、当時の私も自転車に乗って色々な場所に出かけました。また、自転車に乗れるようになった時に、どこまでも行けるような気がしたことを思い出しました。それがバイクに乗れるようになり、車に乗れるようになると今まで自転車で向かったはずの距離も『遠い。自転車じゃ無理。疲れるから自転車はもう乗りたくない…』という思考になっていったわけです。ものすごい知識と研究に使う機材や環境そのものを持っているはずの植松さんにとって研究に駆り立てられる気持ちの源は、少年のような『好奇心』だと思います。経験や知識によって得たものを活用することは当然ですが、『新しい武器を手に入れた!』と、グレードアップした自分に期待とワクワクする気持ちを持って様々な取り組みができたらとても幸せなことですね!